

いよいよ
完結

東京・日本橋〜京都・三条大橋

東海道五十三次を往く

最終回



札の辻・本陣跡付近 この付近は県道(旧東海道)の道路の上を京阪電鉄京津線の電車が走る併用軌道となっている。市電ではない普通の電車が道路を走る風景は全国的にも珍しい。

大津宿

「大津百町」と称された、
五十三次最大の宿場

いよいよ東海道最後の宿場町、大津宿に入る。古くから琵琶湖の湖上交通や街道の要衝として栄え、東海道の宿場町で最大級の規模を誇った。町割が100町もあつたことから「大津百町」と称され、今も滋賀県の県庁所在地として発展し続けている。そのため、当時の面影はあまり残っていないが、それでも街道を歩くと時折古い商家が現れ、宿場町らしい雰囲気を感じる事ができる。木曾義仲が眠る義仲寺を過ぎ、京阪電車の踏切を渡ると道が二又に分かれ、左手の東海道を進むとさらに二又に分かれる分岐点がある。まるで水口宿の三筋の町を彷彿させるような道筋だが、こちらは再び道が合流することはない。滋賀県庁の建物を左手に見ながらしばらく進むと道端に「此附近露国皇太子遭難之地」と書かれた石碑がある。激動の時代に思いを馳せながらさらに進むと京阪京津線の電車が道路の上を走る県道にぶつかる。ここが札の辻で東海道は交差点を左折する。やがて左手に本陣跡が見えてくる。東海道は国道1号線と合流し、山道を上っていくと天下の三関の一つ逢坂山関所跡がある。



ぎちゅう 義仲寺

木曾義仲(源義仲)の墓所であり、彼を敬愛し、この地を愛し幾度となくここを訪れた松尾芭蕉も義仲の隣に眠る寺。義仲の側室とともに戦った巴御前が開山されたともいわれており、巴塚もある。小さな境内には多くの句碑が立てられており、芭蕉ファンの聖地にもなっている。

2016年に日本橋を出発し始まったこの連載。約492kmの道中に設けられた53の宿場を訪ね、ついに終点・三条大橋へたどり着きました。



露国皇太子遭難之地

明治24(1891)年、訪日中のロシア皇太子ニコライが、警備していた警察官に斬りつけられた「大津事件」があった場所。暗殺は未遂に終わったもののロシアの報復を恐れた明治政府が犯人を死刑にするように司法に迫ったが、大審院長は刑法どおり無期徒刑とし、司法の独立を守ったという点からも歴史的に重要な事件だった。



瀬田の唐橋

日本三名橋の一つで近江八景「瀬田の夕照」で知られる。古くから軍事上の要地で「唐橋を制する者は天下を制す」とまでいわれ、多くの歴史の舞台となってきた。



月心寺

逢坂山の関を過ぎた大谷という場所にこんこんと清水が湧き出す「走井」があり、古くは『枕草子』で紹介されている。江戸期に入ると、それにちなんだ名物「走井餅」を売る茶屋が開かれ、広重により「走井茶店」として描かれた。その後、茶屋はなくなり、現在この場所には日本画家・橋本関雪の開いた月心寺という寺院がある。その境内からは今も清水が湧き続けている。



街道の食

きんし井

明治5(1872)年創業の老舗。鰻まむしの上に卵3つを使い薄く焼いて巻き重ねたぶ厚いきんし玉子が載った、見た目のインパクトも大きい街道の名物。

逢坂山かねよ

☎ 077-524-2222
滋賀県大津市大谷町 23-15
※写真は上きんし井



滋賀県庁舎本館

昭和14(1939)年に建てられたルネサンス様式の建物は、滋賀県を代表する近代建築。



大津宿本陣跡

大津宿には2軒の本陣があったが、どちらも遺構は残っていない。ここには大塚本陣があった。



車石

大津宿から京都三条大橋までの間に、牛車が通行しやすいように車輪の幅に合わせて石畳が敷かれていたが、車輪が走る部分が次第に擦り減ってくぼみができた。その石を「車石」と呼ぶようになった。



追分道標

東海道と奈良街道・京街道の分岐点に道標が立つ。右が東海道で京都に向かう。角には「大津百町」の町名板も。



義仲寺を過ぎて京阪電車の踏切を渡ると、道が二又、さらにその先で二又と分かれていく。左が東海道。



滋賀県庁近くの旧街道



三井寺

天台宗の総本山。境内に天智・天武・持統の三天皇の産湯に用いられたという霊泉(井戸)があることから、「御井(みい)の寺」と称され、後に「三井寺」と呼ばれるようになった。



街道の土産

大津絵

江戸時代から大津の職人が東海道を旅する旅人に土産物や護符として描き売ったのが始まりで、鬼や神様などが大胆なタッチでユーモラスに描かれている。



走り井餅

清らかな水が勢よく湧き出る「走井」と呼ばれた井戸のそばに茶屋が立ち並び、この湧水で餅を作ったのが始まりといわれ、東海道の名物となった。

走り井餅本家

☎ 077-528-2121
滋賀県大津市横木 1-3-3



三條大橋 日本橋から約492km続いた東海道は、ここが終点である。広重が描いた三條大橋には大名行列や旅人の姿が見える。京都・三條通りの鴨川に架かる三條大橋は、今でも京都を代表する風景の一つだ。擬宝珠は重要文化財となっている。



八坂神社 創建は平安京遷都以前。「祇園さん」と呼ばれ、古くより人々に親しまれている。日本三大祭でもある祇園祭は、約1150年前(平安時代)に始まった八坂神社の祭礼。

三條大橋

五十三次の終点は、
千年の都の玄関口

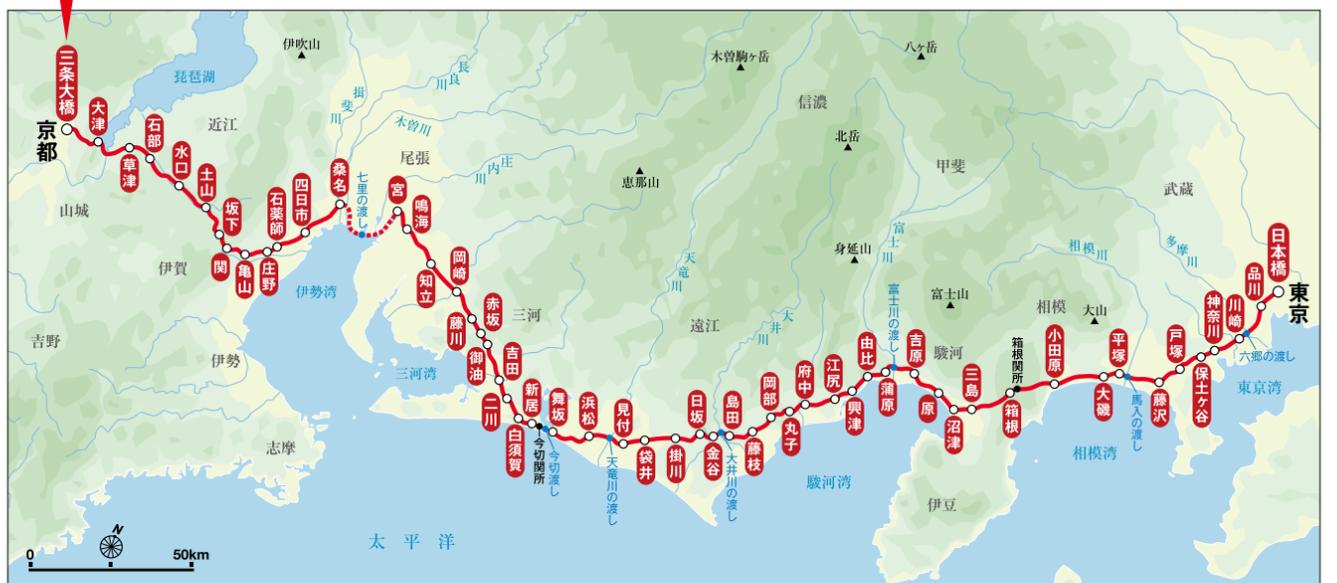
鴨川に架かる三條大橋は、東海道の終点であり、華やかな京の都の玄関口でもある。三條大橋は、天正18(1590)年に豊臣秀吉の命によって、それまでの木製の橋から石の橋杭に架け替えられた。現在の橋は昭和25(1950)年に造られたものだが、欄干の擬宝珠は当時のものが使われている。橋の西岸の先斗町と呼ばれるエリアには置屋や料亭などが並び、今も花街の風情が残っているが、昔の旅人たちも三條大橋を渡って、華やかな京都の街で長旅の疲れを癒したのであろう。多くの旅人を温かく受け入れてきた京都の街は、今では世界中の旅人を迎え入れる街となった。

弥次喜多像

三條大橋の西橋詰に十返舎一九の「東海道中膝栗毛」に登場する弥次さん、喜多さんの二人の銅像が立っている。



GOAL



巽橋 祇園の白川に架けられている小さな石畳の橋が巽橋。巽橋一帯は、京都市の伝統的建造物群保存地区に指定されている。京都らしい雰囲気は、写真スポットとしても人気だ。



祇園周辺 石畳の小路には町屋が並び、情緒豊かな雰囲気があふれている。

あとがき

連載を終えて

ミスモ創刊15周年記念企画として、2016年8月号から当連載がスタートしました。ミスモ発行人であり、この企画の立案者（言い出しっぺ）でもある私を先頭に編集部取材チームが実際に東京・日本橋から東海道のすべての宿場をたどりながら京都を目指し、今号の2025年1月号でついに終点の京都・三条大橋にたどり着きました。連載期間は実に8年半近くに及びましたが、その間、新型コロナウイルスの感染拡大の影響により2年もの間、取材の中断を余儀なくされたり、コロナ禍の不況のおおりでミスモの存続自体も危ぶまれました。ミスモという地域限定のフリーペーパーとしては場違いで分不相

応なスケールの大きな連載だったのではないかと不安もありましたが、連載開始以降、多くの読者の方々に予想をはるかに上回る大きな反響をいただきました。はがきやメールはもちろんのこと、直接編集部までお越しになってこの連載に対する熱い思いをお話しされる読者の方もいらっしゃいました。このようなあなたたち、熱いご声援や激励のお言葉がどんなにか私たちを励まし、勇気づけてくれたことでしょうか。最終回にあたり、この場を借りて深く感謝申し上げます。

2025年1月
発行人 中村和広



『東海道五十三次を往く』の連載に関する感想をぜひお聞かせください。抽選で3名の方に、この連載をまとめた「写真でたどる、現代の東海道五十三次を往く」(上・下巻セット)をプレゼントいたします。

応募方法

アンケートの回答、住所、氏名、年齢、職業、電話番号を明記の上、下記までご応募ください。

アンケート

- ①東海道の連載を読んだ感想をお聞かせください。
- ②今後取り上げてほしい連載テーマをお聞かせください。

宛先

●はがき・封書
〒215-0017 川崎市麻生区王禅寺西3-12-10 佐熊ビル3F
「ミスモ1月号東海道プレゼント」係

●二次元コードからのご応募はこちら→



締切 2025年1月31日(金) 消印有効

当選者の発表は賞品の発送をもってかえさせていただきます。

※プレゼントにご応募いただいた個人情報はプレゼントの発送および個人を特定しない統計的資料作成に利用させていただきます。

街道の土産



井筒ハッ橋

「六段の調べ」などで知られる筆曲の祖、八橋検校に由来し、検校が教え伝えたといわれる京の堅焼き煎餅を琴の形に仕上げ「ハッ橋」と名付けたのが始まり。

井筒ハッ橋本舗 祇園本店

☎075-531-2121
京都府京都市東山区川端通四条上ル
常盤町178



古都五色豆

えんどう豆と砂糖だけで作られた素朴な菓子で500年以上の歴史がある。船はしやは、三条大橋の西のたもとにある明治から続く老舗。

本家 船はしや

☎075-221-2673
京都府京都市中京区三条大橋西詰112

「東海道五十三次を往く」が本になりました！

上・下巻好評発売中

お求めは全国の書店、ネット通販などから。上・下巻各1,650円(税込)。



お求めはこちらからも！

